自分の宅地に居住したい

koberyo1

わたしが子どもだった頃、借地に父親が家を建て、暮らしていた。ところが、である。Kという地主が突然、文化アパートを建てたいから立ち退いてくれ、という。その通告から一年ぐらいで結局、その土地を離れることとなった。父親にとっては家まで建てた土地である。まさに痛恨のきわみであったろう。

昭和のはじめの時代だった。わたしもまだ幼かったが、雨つゆをしのぐ家を失った失望が子ども心に深く刻まれた。その頃からだったと思う。自分の買った土地に安心して住みたいと強く願うようになったのは……。

結婚してからは、日本住宅公団の分譲地を、小田急線沿線の百合ヶ丘や、東京の親元から離れた大阪、和歌山、兵庫などをみてまわった。結局、神戸に土地を購入することになったが、それほどまでして土地に執着したのは、自分の所有地で生涯を安心して生活する喜びを得たいがためであった。

1960年代の末のことだったが、当時、土地債券なるものが登場し、それに飛びついたのである。日本住宅公団の分譲方式は、予定価格の積み立ての約80％以上の購入者に分譲するというもので、この頃は折しも高度成長時代である。

昭和30年ともなれば、東京の土地の価格はドンドンと上昇しはじめ、それに合わせるかのように大阪も、兵庫も土地価格も同様の状況にあった。しかし、関西はそれどもまだ「マシ」で、東京の土地はさすがに居住は到底ムリ、と思わせるほどの高騰ぶれであった。

関西に居住するのであれば、大阪への通勤可能な場所はどこなのか、を考えた。候補地として考えられたのは、奈良であったり兵庫であったりしたが、折角そこが気にいっても抽選なので必ずしも自分の手に入るとは限らなかった。

積立金の80％以上の資格はなんとかクリヤーしていたものの、生活はずいぶん苦しかった。

昭和40年代頃から開始された分譲地を視察するため、ハイキングをかねてまだ小さかった息子とおにぎり持参で、ずいぶん現地をみてまわったものだ。そこは造成後、ずいぶん姿を変えてしまったが、おそらく今思うと、そこは神戸市北区のM一丁目では

なかったか、と思う。橋の近く、小高い場所を選んでおにぎりを息子と食べた思い出が今でもある。サラサラと小川が流れ、のどかな野原で写真を撮った。

　それから妻の要求で、義母ともやはり神戸市北区のおなじ分譲地をに行った記憶がある。

　その辺りはいまは住宅地になってしまったが、耕作地で田畠が整備されていた。牛の啼く声がなんとも寂しく、「モーゥ」の声を何度も聴いた。余りにもさみしいところなので、「こんなところに住むのはよそうよ」と義母がいうのを何度も聞いた。

　晩秋の夕方、閑散とした駅舎で20分から30分ものあいだ、電車を待ち続けた。寒かった。駅の改札口に駅員が一人、ポツンといた。なんとも寒いし、活気のないところだと思った。駅舎の壁に貼られていたゴルフ場の会員権募集のポスターが眼に焼きつき、今でもどういうわけか、瞼の裏に甦ることがある。

　さらにその神戸の山奥の分譲地へと何度も足を運び、ここの土地を買うかどうかについて検討をかさねた。夏の頃、もうこの地へは3回目の訪問だったが、会社の顧問弁護士をしているHさんと釣りにでかけた。釣りといっても渓流ではない。ここに釣り堀があったのである。釣り堀で鮒釣りをすることも楽しみであった。

釣り堀の主人と話をする機会があった。釣りが好きで釣り堀をつくった主は、釣りが好きだったので、定年退職時の全退職金をつぎ込んで、鮒中心の釣り堀と釣り堀小屋をつくったらしい。釣り堀は将来、埋め戻して分譲地にする予定の話をした。
帰りは三宮の鉄板焼き屋で焼肉を食べ、生ビールで乾杯した。最高にうまかったのを覚えている。その後、その地域の小学校で抽選会があった。ようやく何度もかよったその分譲地を購入する決意が固まったのである。

　そして、いま40年以上もすむことになるこの土地を選んだのは、何より最寄り駅からさほど離れていなかった、というのが大きな理由である。

土地の所有権移転登記は完了したものの、さて二年間で建物を建てる資金はほとんどなかった。

当時、1960年代の末で、大阪万博をめざし、日本が巨大なお祭りの渦に突入しようとしている時代だった。この頃の建築ブームは激しかった。どの工務店やあプレハブ施工会社でも、建築費総額の30％の頭金を要求していた。すなわち1000万円の建物の場合、300万円の頭金の契約を要求された。

わたしの場合、80万円ぐらいしか手元に資金がなかったので会社のボーナスをあてにするしかなく、生活も京阪神の社宅を拠点にするしかなかった。

住宅公団との約束の二年間は、瞬時に過ぎた。3年目の正月、会社に銀行の支店長が挨拶にきて、たまたま雑談がわたし個人の住宅の話となった。わたしは言った。家を建てたいのだが、30％の頭金がない旨を話したのだった。

すると、支店長は、

「その頭金は当行が融資いたします」

といった。

融資の条件として、その銀行と取引のある住宅メーカーの大阪支店をつかって欲しい、とのことだった。従って建物は、その住宅メーカーが得意としている木造プレハブ住宅ということとなった。

その住宅メーカーは、業界では新参者で実績が欲しくて施工主を探していたらしい。相互の要望、要求がピッタリ合ったように思う。病気にも罹らず、一家揃って神戸の山奥の新興住宅地に転居できたのは、昭和45年のことであった。

長男は小学2年生、長女は幼稚園児であった。引っ越したのは、暑い盛りの8月のことであった。

早いものでこの地で45年もの歳月を過ごしたことになる。